大高ジャーナル

発行所
鹿児島県立大島高等学校
新聞部
奄美市名瀬安勝町７―１

1面…自然遺産登録その先に
2面…大野君プロ野球選手に
3面…IMALUさんのイベント
4面…第73回体育祭特集
5面…部活動特集他
6面…しまんちゅ釣り人発見他

自然遺産後の未来議論を

オーバーツーリズム対策急務
観光客の誘導・分散の工夫を

世界自然遺産登録のその先に　Vol,1

奄美大島は令和3年の7月に世界自然遺産登録され、多くの観光客が訪れている。しかし、自然保護や観光等の点で多くの課題が残されている。そうした課題の解決に取り組んでいる方にお話をうかがうのが、新連載「世界自然遺産登録のその先に」だ。第1回は、あまみ植物園合同会社の代表で、奄美環境文化コーディネーターとして奄美の環境文化を積極的に発信されている濱田政信さんだ。濱田さんは奄美市世界遺産活用プラットフォーム（本紙1面）の委員でもある。今回は、奄美のオーバーツーリズムの現状と、その解決策についてお話をうかがった。

あまみ植物園合同会社代表
はまだまさのぶ
濱田政信さん（57歳）

1966年1月 奄美市名瀬生まれ，1984年 大島高校卒業，1988年南九州大学造園学科卒業，同年4月都市計画・公園設計事務所へ入社，1995年結婚を機に奄美へUターン 実家（株）浜田植物園へ入社，奄美パークの調査設計のサポート他、主に公共スペースの設計施工管理に携わる，2022年2月 鹿児島大学リカレント教育＜奄美環境文化教育プログラム第1期＞修了，2022年5月 あまみ植物園合同会社設立，１級造園施工管理技士、ランドスケーパー、奄美環境文化コーディネーターとして実務の他に奄美の環境文化の発信を行っている。あまみFMにて2番組受け持つ他、ポッドキャスト＜奄美の話＞を配信中。

自然と集落の共存こそ奄美の魅力

私は、奄美の大きな魅力の一つは、山などの自然のすぐ近くに集落が共生していて、そこで独特の伝統行事が行われ、生活が営まれている点だと思います。奄美は自然遺産に登録されましたが、自然だけで終わってしまってはもったいない島なのです。しかし、多くの観光客は、まずは奄美の美しい海などの自然を目当てに訪れます。自然遺産に登録された原生林はツアーガイドが同行しないと入れませんから、当然受け入れられる人数には限界があります。今後、さらに観光客が増え続けてしまうと、地元住民の生活圏内にまで観光客が無計画に押し寄せてしまい、住民のストレスがたまり、集落の伝統行事などの文化的な事業がかえって停滞する可能性もあります。また、観光客により自然が破壊されてしまうと世界自然遺産登録そのものが取り消されてしまうかもしれません。こうした課題を解決するためには、観光客の動線を、島の集落にまで計画的に広げオーバーツーリズムを解消していくことが必要だと思います。しかし、今現在の奄美には集落へ観光客を誘う仕組みが不十分です。そこで、私が提唱しているのが「サイン計画」です。これは、群島内でデザインした看板や、モニュメントを設置して、観光客を観光地や集落へ誘導しようという計画です。この計画を実施するにあたっては、島に住んでいる人々が看板やモニュメントのデザインに主体的に関わることが大切だと思います。

濱田さん作成の奄美の「交流動線」のイメージ

人の集中を防ぐ新コースを模索

公民連携会議では、神屋タンギョの滝を活用した新たな観光コース作りも提案しました。タンギョの滝は九州で3位の高低差を誇る迫力のある滝ですが、遊歩道が整備されていないため、観光客は間近に訪れることが難しいです。滝のある住用川流域にはリュウキュウアユが多く生息していたり、すぐ近くにマングローブの原生林があります。また、近くには西仲間という伝統的な行事が色濃く残る魅力ある集落があります。

こうした魅力ある観光資源を活かすことで、観光客を分散させる効果もねらえます。この計画は自然写真家である常田守さんと共に進めていますが、常田さんは「滝を見るルートの整備は、滝を見て観光客に満足していただくことで、その先の自然への不要な侵入を防ぐことにも効果がある」と話されています。

しかし、このような地元住民を巻き込んだ取り組みを行うには集落との協力が不可欠です。集落の暮らし、経済循環、オーバーツーリズム解消のバランスを考えることが大切だと思います。

観光と自然保護の両立は難しい課題です。ぜひ、高校生のような若い世代にも、積極的に議論に参加してもらい、課題解決の挑戦に関わってもらいたいですね。

〔有田結愛〕

奄美市住用町のタンギョの滝。岩に囲まれた難所にある。（常田守氏撮影）

奄美市 公民連携会議

奄美の課題 多角的に議論

奄美市の公民連携会議「世界自然遺産活用プラットフォーム」（座長・須山聡駒澤大学教授）が10月15日と11月20日に同市役所で行われた。

5月に開始されたこの公民連携会議は、奄美大島が世界自然遺産に登録されたことによる各分野への波及効果の活用を目的としており、自然・文化・観光など様々な分野で活躍するコアメンバー14人が奄美の課題について議論を重ね、採択した議案を市議会に提出する。

10月15日には、自治体が条例を定めて税を徴収する「法定外目的税」を自然や文化などの地域資源を維持する財源の確保のために導入することへの検討委員会設置、金作原原生林や三太郎峠で顕在化している観光客の過密問題「オーバーツーリズム」解消のための新たな観光コースの開拓、ノネコ問題解決に向けた民間と行政の連携の強化、などの議題について議論がなされた。

11月20日には、奄美大島の外来種問題について現状を確認。小笠原諸島で繁殖し日本生態学会から「日本の侵略的外来種ワースト100」に指定されている樹木「アカギ」が外来種として認識されずに積極的に植樹されてきたことにふれ、今後の対策への議論がなされた。

10月15日の会議を傍聴した實川結子さんは（2―6赤徳中）「奄美の課題の解決に実際に取り組んでいる人の話を聞くのは初めて。改めて自分のこととして考える良い機会になりました」と笑顔で話した。

〔赤井洸太〕

奄美のオーバーバーツーリズム対策について説明する濱田政信さん

大高ミニギャラリー

吹奏楽部のクリスマスコンサートのクライマックス

奄美大島＝鹿児島県本土から南西約370㎞，面積712.35 ㎢，広さ日本5位(本州等4島除く)の島，亜熱帯海洋性気候，奄美群島国立公園の一部

大高坂

大高未来塾が昨年11月に本校で開催され、生徒たちは卒業生からの人生のアドバイスに耳を傾けた。▼伊東美帆さん（49回卒）は麻薬取締官、薬剤師、不動産業という様々な経歴を持つ女性で、生徒たちの注目を集めた。特に麻薬取締官の仕事について聞きたいと思った私たちだったが、守秘義務が多くほとんど仕事の内容については触れられることはなかった。しかし、「複数の大学を受験し、それら全てに落ちるという挫折」が、人生に与えたインパクトについての話は私たちにとって衝撃だった。▼伊東さんは、浪人生として学習を続ける中で、人生における「資格の重要性」を認識したという。そこからの彼女の多様な資格取得と、多様な職業の人生が展開する。▼大学進学は、私達のこれからの人生を豊かにする手段である。そのため日々プレッシャーに耐えながら受験勉強をしている。しかし、私たちにとって大学進学自体が目標化してしまい、人生の視野が狭まりがちだ。重要なのは大学に進学することではなく、大学に進んだのちにどのような人生を歩むかだ。

〔時田琥太郎〕

〔お知らせ〕大高ジャーナルは，本校の「大高ブログ」からバックナンバーも含めてご覧になれます。

DRAFT2022！

大野稼頭央君 プロ野球選手に

10月21日、プロ野球のドラフト会議が東京で行われ、本校野球部の大野稼頭央投手（3－5龍南中）が福岡ソフトバンクホークスから4位で指名された。奄美大島の高校からは初のプロ野球選手の誕生。本校の多目的ホールで会議の様子を見守っていた大野投手は、チームメイトや両親、塗木哲哉監督と喜びを噛みしめ、プロでの飛躍を誓った。

ソフトバンクから4位指名され，野球部の仲間から胴上げされる大野君。「島から甲子園」を実現した左腕は，プロの切符をつかんだ。

ソフトバンク4位指名

ドラフトの緊張感 一転歓喜に

奄美大島の高校から、初のプロ野球選手が誕生か。午後5時から始まったドラフト会議で、本校野球部の超高校級左腕・大野稼頭央投手が塗木哲哉監督と両親に見守られながら指名を待った。

3巡目まで指名がなく、大学や社会人の選手の指名が多い序盤に会場を包んでいた和やかな雰囲気が、時間が刻々と過ぎ高校生の指名が増えてくると、ピリピリとした緊張感に変わった。開始からおよそ1時間半が経過した午後6時半ごろ、「福岡ソフトバンク、大野稼頭央」との吉報が届き、会場は拍手に包まれた。たくさんの報道陣から盛んにフラッシュを浴びながら、驚きと安堵の混じったような表情を浮かべた大野投手は塗木監督とがっちりと握手を交わし、涙を流す両親の前でチームメイトから胴上げされた。

「大高を選んで間違いなかった」

後日、大野投手は、「指名されてほっとしました。とても嬉しいです。高校で大高を選んで間違いなかったな、と思いました。プロの世界で3年後に1軍のマウンドに上がれるようにトレーニングを積んでいきたいです。

奄美大島の高校初

大野稼頭央君プロフィール

大野稼頭央（おおのかずお）君（3－5龍南中）

2004年（平成16年）8月6日、大島郡龍郷町戸口生まれ。左投左打。戸口小、龍南中卒。小学1年時にソフトボール、3年時に野球を始める。中学3年時には赤徳中との龍郷合同チームの一員として長崎・五島列島での離島甲子園に出場し、4強に進出した。

高校進学時に県本土の強豪校から誘いを受けたが、中学時代に対戦していた金久中の捕手・西田心太朗（現本校3年）から「大島高校で一緒にバッテリーを組んで、島から甲子園を実現させないか」と説得され、大島高校への入学を決断。1年秋からエースナンバーを背負い、2年秋に県大会で優勝、九州大会で準優勝の好成績を収めた。このことが評価されて21世紀枠での選出であった2014年以来8年ぶりにセンバツへの出場を勝ち取り、実力での「島から甲子園」を実現した。

3年夏の県大会では一回戦から決勝戦までを全て一人で投げ抜き、準優勝（学校史上最高成績）に大きく貢献した。躍動感あふれるフォームから繰り出す最速146キロの直球と、キレのある変化球で相手を圧倒し、三振の山を築く。甘党で好きな食べ物はチーズケーキとプリンだが、取材陣には無難にとんかつと答えていたんだとか。〔赤井洸太〕

ソフトバンクのユニフォームを着てポーズを決める。（大野君提供）

ドラフト4位指名の報道に、がっちりと握手して喜ぶ大野君と塗木監督。ご両親もほっとした表情に。

大野君を中心に、野球部の仲間たちとガッツポーズで一枚

福岡ソフトバンクホークスとはどんな球団？

福岡県福岡市にある福岡ドームを本拠地としているパシフィック・リーグ所属の球団。直近10年でリーグ優勝4回、日本一6回という成績を残している。1989年、大阪を本拠地としていた南海ホークスが、福岡に本拠地を移してダイエーホークスと球団名を変更して以降、ホークスは、九州密着型の球団となった。公式球団歌である「いざゆけ若鷹軍団」は、ホークスファンのみならず、福岡県民にも親しまれる歌となっている。また、ホークスのOBで現ソフトバンク1軍投手コーチである斉藤和巳氏（45）と、現ソフトバンク2軍監督の小久保裕紀氏（51）は現役時代、奄美大島で自主トレを行なっていた。〔米田博翔〕

島の次の世代の子どもたちを野球で勇気づけられる選手になれるよう頑張ります」と語ってくれた。奄美の大自然が育んだ左腕に、島中の人々が期待を寄せている。

塗木監督は、「大野投手を見たくて球場に来た、と言ってもらえる選手になってほしい」と話した。

ソフトバンクは、大野投手を「九州ナンバーワンの投手」と評価。仮契約時にはメディカルチェックで医者が驚くほど傷がなく、健康体であったことを明かし、時間をかけて育成していく計画を掲げた。

8年前の甲子園での試合を観戦し、夢を描いた当時小学生の大野投手。彼は、春の選抜大会で聖地の土を踏み、今度は次の世代の子どもたちに更なる夢を与える存在になる。背番号は60番に決まった。遠く離れた福岡での大野稼頭央投手の活躍を、奄美大島の大応援団が祈っている。

〔赤井洸太〕

論説

世界自然遺産登録後の奄美像 高校生も議論に積極的参加を

令和3年7月に奄美大島が世界自然遺産に登録され、島内が祝福ムードに包まれてから1年半が経つ。原生林の生物多様性が高く評価され、世界から関心が集まる奄美の自然。今後、島外からの観光客の大幅な増加が見込まれており、このことについて様々な課題が浮き彫りとなっている。

例えば、特定の場所に観光客が集中して訪れることによって引き起こされるオーバーツーリズム。「観光公害」とも呼ばれるこの問題は全国各地で起こっており、その土地の自然環境や地域住民の生活に悪影響を及ぼしてきた。

奄美でもすでに、金作原原生林や三太郎峠でこの問題が顕在化しており、貴重な自然への影響が懸念されている。日本初の世界自然遺産である屋久島では、急増した観光客が一気に世界遺産のシンボル縄文杉へ押し寄せ、その対応に悩まされた経緯があるという。世界自然遺産への登録により経済効果が期待されつつも、新たな課題も経験した屋久島。そうした教訓を活かした、奄美独自の対策を進める必要がある。

私たち新聞部は、奄美市が主催する公民連携会議「奄美市世界自然遺産活用プラットフォーム」を傍聴し、世界自然遺産登録後の奄美像についての議論から学び、高校生として意見をもつための情報収集をスタートさせた。

会議では、観光産業の活性化や生態系の保護、伝統文化の継承など、それぞれ異なる分野で、奄美の中核として活躍される方々が様々な提言を行い、私たちは大いに刺激を受けた。エコツアーガイド、観光関係者等の「現場からの声」はどれも問題の本質を捉えているものばかりだった。

私たちはこの会議を通して、参加者の方々が、今後郷土が「世界の奄美」として認知されるようになっても、「奄美らしさ」「奄美のアイデンティティー」をなくしてはならないという思いは共通であることを感じた。未来を担う私たち高校生も「奄美のアイデンティティー」を継承・発展させていくために何ができるのかを考えることが大切ではないだろうか。

奄美は現在、多くの問題を抱えている。ノネコやマングースなどの外来生物の繁殖による生態系の破壊。オーバーツーリズムをはじめとした観光の問題。伝統として受け継がれてきた文化や産業の担い手不足。

私たち高校生も、郷土の将来を担う人間として、自分の住む島で今何が起きていて、どんな取り組みが行われているのかを、もっと理解しなければならない。

そして、将来を担う私たちが「奄美のアイデンティティー」について高い意識を持って、未来に向けて行動することが、世界に真に誇れる島をつくることにつながるはずだ。

〔大高ジャーナル〕〔赤井洸太〕

書道部と海上保安庁コラボ

IMALUさん 海の安全と奄美愛を語る

11月7日、奄美海上保安部主催の118番（海上保安庁緊急通報用電話番号）啓発運動のイベントにタレントのIMALUさん（33）を迎え、本校多目的ホールでトークショーが行われた。トークショーでは、IMALUさんが海の安全と奄美の魅力について語り、生徒たちは熱心に耳を傾けた。また、書道部が時岡優里菜さん（2－3名瀬中）の島唄に合わせてパフォーマンスを行い盛り上げた。

海の安全について語るIMALUさん

IMALUさんは奄美のありのままの姿の自然や美しい海に惹かれ、昨年8月から東京と奄美大島での2拠点生活を送っている。

実際に生活を始めて感じた奄美の魅力を「沖縄などと比べて、人がいないところ」と話し、お店が不定期で開いていなかったり、交通手段が少なかったりと不便さを感じることもあるが、観光地化されていないありのままの自然を満喫しているという。

そんなIMALUさんはトークショーの中で出来る範囲ですれば良いという「ずぼらエコ」という言葉を紹介し、「マイボトルを持つだけでも、環境問題について知るだけでも、環境保全に繋がる」と語った。IMALUさんは奄美の環境保全について「まだまだ奄美のことは、知らないことがたくさん。奄美のファンとして自分に協力できることがあれば、ぜひ協力したい」と力強く語った。

島唄にあわせて筆を走らせる

また、トークショーの後には本校書道部の2年生10名が、時岡優里菜さんによる島唄「よいすら節」に合わせてパフォーマンスを披露。書道部がこの日書いた標語は、海洋環境問題をテーマにストーリーを思い描きながら自分たちで考えたという。パフォーマンスのラストには、IMALUさんも「118」の文字を書き添えて作品を完成させた。

島唄での書道パフォーマンスは書道部にとっても初の試みだったという。書道部部長の山下優美さん（2－5朝日中）は「島唄でのパフォーマンスは歌詞が全て方言で、三味線の音だけの所もあって、歌詞の意味を考えたり振りを覚えたりするのが難しかった。完成した作品を見ていただき、作品に込めた奄美の海の美しさや海の環境保全についての想いが伝わるとうれしい」と笑顔を見せた。今回書道部が作成した作品は海上保安部が1月18日の「118番の日」に配布する啓発グッズに使用された。

イベントを終えたIMALUさんは、島の高校生へ向けて「環境問題について楽しく話し合う機会を持つことが大切。ぜひ地元の若い世代の人たちが情報を発信してほしい」と期待を寄せた。

また、奄美海上保安部樋口則一部長は「地元のきれいな海を誇りに思い、将来どのような形でもこの海を守るための仕事に就いてくれたらうれしい」と語った。

今回のイベントを通して、改めて奄美の海と環境保全について思いをめぐらす機会となった。また、IMALUさんが話した奄美の魅力は「人のいないところ」という言葉についても、奄美に住む者としてその意味をしっかりと受け止めたいと感じた。

〔関佳世〕

クイズ コクト君とまーじんま！

Q 奄美の正月料理として有名な三献（さんごん）。餅入りの吸い物の赤椀，鶏肉もしくは豚肉の吸い物の黒椀，刺身の3つの料理で構成されるが，その食べる順番として正しいのは次のうちどれ？

①赤椀　→刺身　→黒椀
②刺身　→赤椀　→黒椀
③黒椀　→刺身　→赤椀

GLOBAL CLASSROOM

台湾とオンライン交流

オンラインで海外の学生と交流する「グローバルクラスルーム」は、本校のST（総合的な探究の時間）の中で行われた。この取り組みは、台湾の学生とオンラインで交流し、英語でコミュニケーションを行い、英語力の向上と国際意識の醸成を目的としている。5回にわたり行われたこの企画の1月の発表会の模様を取材した。

オンラインで海外と交流容易に

機材トラブルも思い出に

今回、取材した班では、日本側が奄美の消えゆく方言について、台湾側はプラスチックによる海洋汚染について発表した。質問の時間は、テーマについてだけではなく、台湾の学生が中国語の名前と英語の名前を持つこと等いろいろな話題で盛り上がった。

ジェンダー・LGBTQをテーマとしたグループの且爽音さん（1－2金久中）は、「実際に海外の人と交流することでネイティブの英語を聞き取り、会話することができた。海外の同世代と意見を交換して、充実した時間だった」と語った。

参加者は、オンラインでの交流ということもあって、音が聞こえない、映像が見えない等の機材トラブルもあったが、「それもまた交流のよい思い出」と口を揃えた。

コロナ禍で急速に進んだオンライン交流。離島の学校に通う私たちも容易に海外とつながることができる。

こうしたオンライン交流が充実して、離島の高校生のハンデが解消されることに期待したい。

〔永喜海迅〕

かごしま総文　新聞部門プレ大会参加報告

開催期間 2023 7/29(土) ▸ 8/4(金)

イメージキャラクター「かごまる」新聞部門バージョン

県内高校生記者 桜島の防災について新聞作成

鹿児島県では、令和5年7月29日～8月4日にかけて、第47回全国高等学校総合文化祭（かごしま総文2023）が開催される。鹿児島県が47都道府県の一巡目ラストを飾る記念すべき大会だ。総合文化祭とは、全国から約2万人の高校生が集まり、19の規定部門ごとに日頃の活動の成果を披露し、生徒の交流や親睦を深めるいわゆる文化系部活動のインターハイだ。それに伴い、今年度は各部門で次年度を見据えたプレ大会が開催されている。

新聞部門でも令和5年7月29～31日に行われる本大会へ向け、12月3～4日の2日間、志學館大学でプレ大会が開催された。本校新聞部からは7名の部員が参加。県内の高校生と共に交流新聞を作成することで、新聞作りの技術を磨き、仲を深めあった。〔有田結愛〕

新聞部門
生徒実行委員長
有田結愛（ありたゆめ）
（2－1朝日中）

火山との共生実感

1日目は主に、交流新聞作成のための取材を行った。今回の取材先は、本大会でも取材コースの一つとして設定されている桜島。フェリーに乗って桜島へ上陸し、バスで桜島を一周しながら、桜島ビジターセンター、黒神埋没鳥居、有村溶岩展望所、国際火山砂防センターの4か所を訪れた。桜島について防災、歴史、観光などさまざまな観点から学ぶことができた。

桜島ビジターセンターでは、桜島の防災について学んだ。桜島では毎日のように噴火が起こっており、いつ火山噴出物が生活エリアに降るか分からない。そのため、桜島では小学生はヘルメットを着用して登下校をしたり、島の至る所に、退避壕や島外に避難するときに使用する避難港を設けたりするなどの、火山と共生する島ならではの防災対策がとられていた。

大正大噴火で火山灰に埋もれた黒神埋没鳥居

また、取材先への移動中には、外観が茶色などの落ち着いた色で塗られているコンビニやスーパーを発見。桜島は国立公園に指定されているため、景観と調和させるためにこの色になっているという。

このような風景は、同じく貴重な自然環境を持っている奄美大島と大きく異なりとても驚いた。

地域住民の方のガイドで桜島の構造の説明を受ける（有村展望所）

4時間のリミット 編集作業に没頭

その後は、取材後の1時間と2日目の午前中、計4時間かけて交流新聞を作成した。私は、桜島の成り立ちと噴火の歴史に関する記事を担当。それと並行してとうきょう総文で交流新聞を作成した経験を生かして、班員のサポートもしなければならず大変だったが、なんとか時間内に新聞作成を終え、大きな達成感を味わうことができた。

記事を分担し、B4裏表の紙面を完成させる。

完成した新聞冊子を手に、次年度の総文祭の成功に向け決意を新たにした。

来年の総文祭へ向けてのプレ大会が開催され、総文祭本大会の流れを掴んだり、総文祭を共に作り上げる仲間である県内の高校生との交流ができたりしたことはとても貴重な経験になったと思う。

新聞部門は、総文祭本番では、300名超の高校生記者が全国から訪れる。プレ大会の経験をしっかりと活かして、これからの準備や運営に励んでいきたい。そして来年、全国の大会参加者に「鹿児島に来てよかった」と思ってもらえるような総文祭を作り上げられるよう頑張っていきたい。

笠龍の新演舞　観衆魅了

大島高名物 体育祭特集

笠龍地区

応援の部，最優秀賞の笠龍地区（緑色・りゅうりゅう・龍郷・笠利の各中学校の出身者で構成される）のフィナーレ。野崎凡央団長のもと，伝統を引継ぎつつも，アレンジした見事な演舞に観衆から盛んな拍手が送られた。

上方・笠龍 同点で優勝

競技の部

令和４年９月７日（水）本校上部グラウンドにて、第73回体育祭が開催された。

地区対抗の競技・応援で全国的にも知られる本校の体育祭。今年度は台風の影響を大きく受け、２回の順延を経ての開催となった。コロナ禍のため、昨年同様に、保護者の観覧はなく、午前開催となったが、台風一過の青空の下、伝統の地区対抗の応援団や俵運搬リレーに生徒たちはさわやかな汗を流した。

競技の部では上方（かみほう）、笠龍（りゅうりゅう）地区が同点で優勝となり、応援の部では２大会連続最優秀賞の金久（かねく）地区を抑えて、笠龍地区が最優秀賞に輝き、競技の部と応援の部で２冠を達成した。また、俵運搬リレーでは、男子は中南（ちゅうなん）地区が２分23秒で優勝、女子は笠龍地区が２分35秒で優勝した。

コロナ対策を意識　午前開催に

昨年に続き大高伝統のムカデ競争は中止となったが、俵運搬リレーや男女１００Ｍ走、２００Ｍ走、地区対抗リレー、新競技のクラス対抗の長縄跳びで生徒たちは熱戦を繰り広げた。

競技の部においては、優勝は同点で上方地区、笠龍地区となった。競技の部で１位となった上方地区の責任者武田涼雅君（３―２朝日中）は「率直に嬉しいです。地区のみんなが１位を目指してよく走ってくれたと思います」と語った。また同点で１位となった笠龍地区の責任者土岐直也君（３―１赤木名中）は「地区のみんなが協力して頑張ったからこそ優勝できた。地区の全員で優勝の喜びを分かち合いたい」と振り返った。

地区対抗の俵運搬リレー。男子30キロの俵を8名でつなぐ。

大高の体育祭の目玉である応援団の演舞は、最優秀賞は笠龍地区、優秀賞は金久地区となった。笠龍地区は、地区伝統の龍の舞いを引き継ぎつつ、ハイビスカスをイメージとした新演舞をラストに披露し観衆を魅了した。笠龍地区の応援団長、野崎凡央君（３―６龍南中）は「後輩たちにはこれからも地域伝統の応援をしっかり繋いで行ってほしい」と後輩への期待をにじませた。

応援練習も工夫　制限を乗り越え

また、中南地区では女子の応援団長が団をまとめ注目された。中南地区団長の政涼音さん（３―１東城中）は、「中南は他地区に比べて少人数だが、たくさんの人が協力してくれてとても感謝している。コロナ禍で練習が制限された中、団員たちは一生懸命頑張ってくれた」と団員を労った。

今年の応援団の練習は、コロナ禍ということもあり、例年各地区ごとに校外で行われていたものが校内以外禁止となった他、夏休みの練習期間も制限された。昨年から応援団に所属している団員からは規制の緩和を求める声もあったが、各団で練習の内容を工夫するなどして乗り越える姿が見られた。

寺下先生のリードで，３年生のダンスに先生方も挑戦

また、コロナ禍の体育祭を明るくする種目として注目される集団演技も各学年ごとに披露された。１年生はWANIMAの「CHARM」という曲でフォーメーションダンスを披露。２年生は緑黄色社会の「Mela!」という明るくテンポの良い曲に合わせてレベルの高いダンスを舞った。３年生はスポーツドリンク「ポカリスエット」のＣＭソング「キミの夢は、ボクの夢。」にのせてオリジナルダンスを披露。ダンスの途中で、３年部の先生方が参加し、動きの速い振付に苦労する姿は会場を沸かせた。

３年生は、新型コロナウイルスの影響を大きく受け、高校生活３年間、有観客での開催や制限なしで体育祭を行うことは一度もなかった。しかし、制限がある中でもそのあり方を模索し、大高の体育祭の伝統である応援団や俵運搬リレーなどを次世代に引き継いだ３年生の功績は大きいと言えるだろう。

〔米田博翔〕

金久地区

（黄色・かねく）（金久中出身者、金久中校区の住所の生徒で構成

中南地区

（白色・ちゅうなん）大和・住用・宇検・瀬戸内の各中学校の出身者で構成

伊津部地区

（青色・いつぶ）名瀬中出身者と名瀬中校区の住所の生徒及び離島の寮生で構成

下古地区

（紫色・しもこ）小宿・大川・崎原の各中学校出身者、小宿中校区の住所の生徒で構成

上方地区

（橙色・かみほう）朝日中・芦花部中出身者、朝日中校区の住所の生徒で構成

文武両道の活躍

秋冬の主な戦績

県中高生英語プレゼンテーションコンテストにて（英語部）

吹奏楽部

〔第46回鹿児島県高等学校音楽コンクール木管楽器部門〕金賞　松原こゆき（３―１朝日中）金賞　渡邉美優（２―５龍南中）

書道部

〔第60回記念南日本七夕書道展〕県書道会賞　吉野花音（３―３朝日中）南日本書道会賞　畠山ゆずな（２―４金久中）南日本書芸術学園賞　原二葉（２―１朝日中）〔第27回全日本高校・大学生書道展〕全日本高校・大学生書道展大賞　上野凛（３―１朝日中）全日本高校・大学生書道展賞　川嶋かのん（３―４龍南中）河村風結菜（２―１小宿中）山下優美（２―５朝日中）団体賞　高等学校の部　第10位〔第53回鹿児島県高等学校書道展〕高文連賞　勝村美祐（２―１小宿中）武愛良（２―５金久中）秀作賞　河村風結菜　原二葉　山下優美〔第33回鹿児島県高等学校揮毫大会〕創作部門　高文連賞　河村風結菜　原二葉　若松美冴（２―１金久中）優秀賞　西田歩乃佳（２―２金久中）　畠山ゆずな　山下優美　臨書部門　優秀賞　佐竹千夏（２―６赤徳中）川元幸音（１―２小宿中）

美術部

〔奄美警察署　防犯うちわポスターコンクール〕金賞　當田青波（２―４金久中）〔第21回奄美を描く美術展〕コンロンカ賞　盛こころ（１―３名瀬中）〔第73回鹿児島県高校美術展〕準大賞　盛こころ　秀作賞　當田青波

奄美の海で祖父が見せてくれた夜光貝の輝きを描き、コンロンカ賞に輝いた盛さん。

新聞部

〔南日本新聞社主催　第70回学校新聞コンクール〕高校の部一席（最高賞）

文芸部

〔第22回鹿児島県高校生文芸コンクール〕短歌部門　優秀賞　朝沼こころ（３―３金久中）　優良賞　箕輪ゆりあ（１―４龍南中）俳句部門　優秀賞　朝沼こころ　文芸誌部門　優良賞

英語部

〔鹿児島県中高校生英語プレゼンテーションコンテスト〕第２位

水泳部

〔令和４年度　鹿児島県高等学校新人体育大会水泳競技〕男子１００Ｍ背泳ぎ　第２位　有村颯太（２―１金久中）〔鹿児島県スポーツ協会〕国体選手証　水泳競技　和田慎平（３―１小宿中）

陸上部

〔令和４年度　鹿児島県高等学校新人体育大会　陸上競技〕男子５００００Ｍ競歩　優勝　原勇輔（２―５東城中）〔令和４年度　全九州高等学校体育大会新人陸上競技大会〕男子５０００Ｍ競歩　第３位　原勇輔

空手道部

〔令和４年度　鹿児島県高等学校新人体育大会　空手道競技〕男子団体形　第４位　男子団体組手５人制　第４位　男子76キロ超級　第１位　和田光翔（２―３朝日中）

各種コンクール等

〔高校生　課題研究発表大会２０２２〕ステージ発表部門　奨励賞　徳田碧波（３―２亀津中）〔民謡民舞九州地区大会〕優勝　時岡優里菜（２―３名瀬中）〔鹿児島県高校生ビブリオバトル大会〕Ｄブロック　優勝　勇社那（３―２金久中）〔國學院大學主催「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト〕佳作　信島拓志（２―１古仁屋中）〔大阪経済大学　高校生フォーラム　17歳からのメッセージ〕奨励賞　長濱康太（１―５阿木名中）〔第19回ネリヤカナヤ創作童話コンクール〕高校生の部　最優秀賞　内野真緒（３―１名瀬中）〔日本新聞協会主催　第13回いっしょに読もう！新聞コンクール〕奨励賞　岡山虹芽（２―３小宿中）

大高一番星

時岡優里菜さん（２―３名瀬中出身）

今回の大高一番星は、奄美の伝統文化である島唄を伸びやかな声で唄いあげる唄者、時岡優里菜さんだ。時岡さんは9月3日、4日に熊本県で行われた民謡民舞九州地区大会（公益財団法人日本民謡協会主催）で三百人以上の中から総合優勝を果たし、全国大会への出場権を獲得した。また、本校の文化祭はもちろん、本紙3面掲載の海上保安庁主催イベントや2023かごしま総文関連のイベントなどで唄を披露し、ますます活躍の場を広げている、まさに大高一番星だ。

Q　島唄を始めたきっかけはなんですか

A　母が元々島唄が好きで、よく大会やイベントに連れて行ってもらったことで、だんだんと興味を持つようになりました。5歳ごろから島唄に触れ始め、小学校1年生から本格的に習い始めました。

Q　練習について教えてください

A　週に1回は先生の家で、残りの日は毎日1時間程度自宅で練習しています。自宅で練習するときは、唄うだけでなく歌詞の意味を理解したり、先生の歌声をじっくりと聞いたりする時間も作っています。3日唄わないだけで全く思い通りに唄えなくなるので、毎日欠かさず練習しています。

Q　唄う時に心がけていることはなんですか

A　島唄には、先人たちが歌詞に込めた意味があります。その意味をしっかりと理解して、歌詞の情景を想像しながら感情を乗せて唄うようにしています。そうすることで、唄っている間も周りの様子に左右されずに落ち着いて唄うことができています。

Q　出場した九州大会の感想を教えてください

A　私は「長雨切りゃ上がり節」という唄を唄いました。初めての九州大会という大舞台だったので、結果にこだわるよりもとにかく楽しむことを心がけていました。また、同世代の奄美からの出場者も多くいたので、お互いに緊張をほぐしあっていました。そのため、全く緊張することなく楽しく唄うことができたので良かったです。

結果については、出場した部門内では優勝できる可能性はあると感じていましたが、まさか総合優勝できるとは思ってもいなかったためとても驚いたというのが正直な感想です。

Q　これからの目標を教えてください

A　九州大会で総合優勝をしたことによって、今年の10月に東京都で開催される内閣総理大臣賞争奪戦（民謡）への出場権を獲得しました。この大会は各地方の総合優勝者のみが出場できる大会なので、出場できるだけでもとても嬉しいことだと思っています。ですが、やはり出場するからにはできるだけ上位を目指したいです。そのために、これからもますます練習に励んでいきたいと思っています。そして、私の最終的な目標はずっと島で唄い続けることです。将来は看護師になりたいと思っているので、島で看護師として働きながら唄者としても活躍できるようになれたらいいですね。

〔有田結愛〕

九州地区大会での表彰の様子

高等学校総文祭プレ大会（西原商会アリーナ）

全国への道を拓く

水泳部

とちぎ国体の選手証を受領した和田君

和田慎平君（３―１小宿中）は、第70回全九州高等学校水泳競技大会で男子50Ｍ自由形第３位となり、全国高等学校総合体育大会水泳競技大会（四国総体）に男子50Ｍ自由形で出場し、予選21位となった。和田君は「三年生になるまで全国に出ることができると思っていなかったのでとても驚きました。四国総体に向けて、部活では泳ぎ込んだりはせずに、飛び込みなどの基礎練習を重点的に行いました」と語った。また、和田君は8月の半ばに鹿児島市で、鹿児島県水泳連盟主催の合宿にも参加している。その合宿は、全国大会に毎年出場するような選手や、そのコーチが集うレベルの高い、環境が整ったものだ。「合宿では、本番を模してタイムを測る練習をしました。練習のレベルが高く大変でした」と振り返った。「総体に出場できたこと自体は嬉しいでしたが、自己ベストを出すことができず、予選敗退となり悔しかったです」と語った。

令和４年度全九州高等学校選手権新人水泳競技大会男子背泳ぎ１００Ｍで惜しくも予選敗退となった有村颯太君（２―１金久中）は「目標として九州に行くことは前提でした。しかし、コロナの影響により、練習に二回しか参加できず不安でしたが、試合に出場できたことは幸いでした」と語った。

九州大会を終えて有村君は「九州での結果は全然ダメでした。プールが屋外にあり、背泳ぎで出場した自分には日差しが眩しく、慣れない環境に苦戦しました」と振り返り、「自分の弱い部分を研究して、弱い部分を重点的に鍛えながら、得意な部分も伸ばしていきたい。ドルフィンが弱いので、キックを特に意識しています。練習でもストレッチ等を工夫しています」と次に向けた取り組みを語ってくれた。

「先輩が全国総体や国体に出場するなど良い結果を残したので、自分も頑張りたい」と意気込んでいる。

現在水泳部は、部員４名、マネージャー３名の二年生のみの構成となっている。部活動に入っていない人は、水泳部に入って部し、彼らの活躍に続いてはどうだろうか。

〔時田琥太郎〕

九州大会（沖縄）会場前での有村君

※記事中の本校生の個人名に併記した中学校名は，出身中学校です。

Vol. 3

レジリエンス

６月27日、僕は母と奄美から駆けつけてくれた祖父と一緒に手術室の前にいた。一回目の手術は無事終わって、この日は二回目の手術だ。内容は開頭手術。「待ってるからね」二人はそう言ってくれた。

手術室の中に先生の姿は無く、看護師や麻酔科医などが準備をしていた。生年月日と名前を言い、本人確認が終わったあと、看護師さんに促される通りに僕は手術台に寝転ぶ。手術とは不思議なもので、受け入れてしまえばそれに対するハードルはぐんと下がる。緊張はあまりしなかった。

「麻酔入れますね」僕が天井から生えるライトを観察していると、声が聞こえてきた。点滴の針が入れられているところから冷たいものが流れてくるのを感じる。これが最後の手術だ。このとき既に症状が出始めてから二ヶ月が経とうとしていた。歩くのも辛かった。寝たきりの生活にも終止符が打たれる。それが何よりも、何よりも嬉しかった。

そろそろ麻酔が回る頃だろうか。次に起きたときには手術は終わっている。今やれることは何だろうか。僕は少し考え、心の中で祈った。無事成功しますように。

ピッ、ピッ、ピッ。意識が彷徨う中、薄っすらと一定のリズムを刻む機械音が聞こえてくる。心臓の声が僕に手術が終わったことを知らせてくれた。手術が終わるとICU（集中治療室）で病室に戻れるまで術後のケアを受ける。

手術する前までは何もついていなかった左手の甲には、いつの間にか点滴の針が4つほどつけられており、体には心電図などにつながるコードがシールで貼られていた。口には手術の際に入れられた人工呼吸器の管が入っており、話すことも水を飲むこともできない。

麻酔の効果が切れだし意識が正常に戻り始めた頃、やっと管を取ることが出来たが、極度の喉の乾燥と溜まった痰を出す作業がとても辛かった。手術よりも術後の方がキツイ。これは僕がこの体験を通して知った、意外な真実の一つだ。

６月30日、晴れてICUから一般病棟に戻ることができた。久しぶりに自分の病室に帰ってきたが、秒針は絶えず働いているようで、以前は埋まっていたベッドが空になっていた。手術中やICUにいる間は麻酔によって意識が朦朧とし、時間という概念が消え去る。その光景は僕に時の流れを思い出させた。

今、僕の頭は包帯で巻かれている。数日して包帯は外すことができたが、初めて自分の頭を見たときは恐怖を覚えた。左耳の前から頭の前方にかけて髪が生えていない細いラインが浮き彫りとなり、そのラインを横に渡るようにホッチキスのような金属が等間隔に打たれている。生々しく自身の存在を強調しているそれは、この世のものとは思えない極めて異質なものであった。

気になる手術の結果はというと「完全に樓（ろう）を切除することはできなかった」というものだった。手の届かないところにも樓があったためだ。そこで宮崎県の病院でガンマナイフという機械を使った放射線手術をすることになり、その手術は8月10日にすることとなった。初めは驚いたが、母曰く身構えするほどのものではないらしい。

理由を尋ねると「開頭を乗り越えたんだから余裕でしょ」と笑いながら言うので、僕も思わず笑ってしまった。

ロゴ・文とも〔野﨑瞬〕

しまんちゅ　釣り人発見

大高メンズの休日と言えば「釣り」。青空に抱かれての釣りは島人（しまんちゅ）の心もお腹も満たす最高の趣味。今回の釣り人は、平日はラグビーボールを！休日は魚を追い続ける熱い高校生、西田徠夏君だ。

西田徠夏（にしだらいな）君
（2-5古仁屋中出身）

西田君が釣りの楽しさを知ったきっかけは、小さいころから父親とよく一緒に海に行き釣りをしていたことだ。普段は、地元の古仁屋や父親の出身地である加計呂麻島で釣りをするが、時には祖父に船を出してもらい磯に降りて釣りを楽しんでいる。

今まで釣った魚の中で一番大きい魚は、60センチほどのギンガメアジ。その時に使用した釣り糸は、PEライン1．2とワーダーの6号。釣り上げた場所は、古仁屋のコーラル橋（せとうち海の駅近く）あたりの海。「ググっと釣り竿から伝わる感触と何が釣れるかというドキドキ感で釣り糸を巻き上げた。すると、大きなギンガメアジだったので、とても興奮した」と嬉しそうに語った。ギンガメアジを持ち帰ると父が捌き、刺身にして食べた。いつも食べる刺身と違い身がぷりぷりしていた。その日の夕食は、魚釣りの話で大いに盛り上がったとか。餌は、パックで売っているキビナゴやオキアミを使用している。

西田君に釣りの魅力を尋ねると、「一人でも、友達と一緒でも楽しめて、誰が何を釣ってもうれしさを共有できるところ」と爽やかな笑顔で語ってくれた。

これからも大物の魚を釣り上げ、釣りの楽しさと共に奄美の大自然の良さを多くの人に伝えて欲しい。

〔島名真生〕

西田君が釣り上げたギンガメアジ

わんとで帰ろう。

募集中　通学路のイチ押し風景

疲れて帰った日に空を見たらとても綺麗だったので思わず写真におさめました。勉強の疲れが一気に無くなるほど美しい景色でした。

〔3年　りんご〕

放課後ぐるぐる

大高生の青春グルメを紹介する「放課後ぐるぐる」。「美味しく、お財布にやさしく、そしてインスタ映えする」の3拍子そろった学校近くの名店を紹介する。今回訪れたお店は、大高生の間で最近話題になっているクレープとたい焼きのお店「あーる」だ。

「あーる」は、AiAi広場の向かい側にあり、大高から徒歩10分ほど。クレープとたい焼きという面白い組み合わせがメインの、甘いもの好きにはたまらないお店だ。

店内には、商品のおいしそうな写真がたくさん貼られていて、どれを選ぶか迷ってしまう。

「あーる」の店主の山田照美さん（72）に、お店を始めたきっかけを伺うと、「奄美大島で甘いものが食べたいなと思ったとき、意外にも食べられるお店が少ないなと感じました。そこで私自身が作ってお客さんに提供しようと思いました。何を作ろうか迷ったとき、若者に人気のクレープや、幅広い世代の人々に食べてもらえるたい焼きを思い付き、今のメニューになりました」と説明してくださった。

1番の人気メニューを伺うと、「やっぱり当店自慢のオリジナルたい焼きチョコ生クリーム（580円）ですね」と答えてくれた。

このクレープは名前の通り、クレープにたい焼き（中身の味は変更可能）が入っている。まるでクレープの中の生クリームの海から、鯛が元気よく顔を出しているような、とても縁起が良い形だ。

実際にいただいてみると、濃厚な生クリームと、鯛焼きのあんが溶け合い、やさしく、まろやかな味わいが口の中いっぱいに広がる。

見た目以上にかなりのボリュームで、完食した時にはお腹いっぱいになり、幸せな気持ちになった。

大高生へのメッセージを伺うと、「いつもたくさんの生徒さんがお店に来てくれて心から感謝しています。今回の記事の掲載を記念して、特別なサービスを提案しますね。

お店の記事が掲載された『大高ジャーナル』を持参してくれた大高生には、一回のみですが、クレープやたい焼きなどの商品を40円値引きします！皆さんぜひお店に来てくださいね」と驚きのサービスを提案してくださった。

学校帰りや休日など、ぜひあなたも「あーる」に足を運んでみては？幸せな気持ちになれること間違いなしだ。

〔盛蒼太郎〕

味はもちろん見た目のインパクトも抜群の「オリジナルたい焼きチョコ生クリーム」（580円）

あーる
営業時間　11時半～19時
奄美市名瀬末広町16―6　大高より徒歩10分　AiAi広場向かい

クイズ　コクト君とまーじんま！の答えよ

答えは1番よ。三献の間に、塩、さきいか、昆布でできた塩盛（シュームリ）や、スルメやヒムン（干物）を食べる家庭もあるそう。西郷隆盛と愛加那（あいかな）との祝言でも、「三献」が振る舞われたそうよ。奄美の食の伝統を未来へ受け継いでいきたいわね。

〔永喜海迅〕

赤椀（右）刺身（中）黒椀（左）の順番で。（せとうちなんでも探検隊より）

【編集後記】先輩方の引退後，初の新聞発行でした。不安もありましたが，無事に紙面を完成できてほっとしています。（赤井洸太）